A 85　食品の色と嗜好に関する研究（第4報）

—食物嗜好と連想食品との関連，10年間のデータから—

香川県明善短大　○川染鄭江

目的　食品の色は、外観特性の一つとして旨い、形よりも強く食物嗜好に影響すること、暖色系が好まれる傾向についてすでに報告した。今回は、色彩別に連想食品を調査した、1972年から10年間のデータをもとに、年次的推移および食品の嗜好との関連について検討し、若干の知見を得たので報告する。

方法　調査した色彩の数は、第1・2・3報（第30・32・33回日本家政学会要旨集）と同じで、赤、オレンジなど7～9色とした。回答する食品数は、調査年度により3～1種に規定した。3種の調査は、'72, '74, '76, '77, '78, '79の6カ年（1,064名），2種は'73, '75の2カ年（240名），1種は'80と'81年（328名）である。パネルは、色彩嗜好が成熟期に達する女子大生の集団で総計1,632名である。結果は、連想食品の規定数により3グループに区分して出現率（頻度／総数×100）と選択率（頻度／パネル×100）で比較した。年次的な出現率の推移と色彩間の比較は、χ^2値およびクラメアの連関係数（V）を求め統計的に検定をした。

結果　(1) 連想食品の主なものは、各々色彩に対して2～4種で果物と野菜が多くあげられた。青に対する回答率が低いのは、寒色に対する嗜好度が低いことが影響していると思われる。(2) 3種で調査した'72年から'79年までの年次的な相異は、χ^2検定による有意差は認められず、主な連想食品には普遍性があることを示した。(3) クラメアの連関係数（V＝0～1）は、3種が0.111～0.223，2種が0.147～0.213，1種は0.093～0.292で全体に少なく、色彩間の差はわずかであった。